

何のために選ぶかという目的がはっきりとそこに述べられています。簡単に言うと、イエズスといつも一緒におらせるため。これは分かるような気がしますが、イエズスが自分の使命をこの人たちに後で託するということになりますから、だから四六時中一緒にいて教育をする、全部知ってもらう、全部見ってもらう、全部聞いてもらうという形で自分の使命を受け継いでもらうための教育をするためにこの人たちを選ぶ。だから、この後、ずーっとこの人たちはイエズスと一緒に生活します。私があるとき「金魚のふんみたいだ」って言ったら叱られたんですけど(笑)。金魚のふん、ひどいです。でも、そんな感じがするくらいずーっと一緒なんですね。仕事をするときも、旅をするときも、食事のときにも、人々から非難されるときにもいつもこの弟子たちはイエズスと一緒に過ごします。

もう一つの目的は、イエズスがこれからしていくことと同じことをやがてさせるため、ここでは「派遣して宣教させ、悪霊を追い出す権能を持たせるため」。これがイエズスがこれからやっていく使命なんですけど、だからイエズスと同じ使命をやがてさせるためと目的がはっきりと述べられてあって、その12人のリストが出てきます。個人的な名前がばーっと12人挙げられるわけです。こういう挙げ方はちょっと他に例がないので、よっぽど重要な12人と考えられていたことの印なんです。もっと細かく調べると、12人のリストの並べ方が同じなんです。これは福音書に4カ所出てくるんですけど、何から何まで同じではないですけど並べ方が同じ、つまりリストの一番最初に出てくる人と一番最後に出てくる人の名前。このリストは恐らく3人×4というまとまりで並べられてると思うんですけど、そのグループの最初に出てくる人の名前はみんな同じ。すると、これは偶然そうだったと考えられないので、意図的にそうしたということになりますから、何のためにそんなことをしたかという、たぶん覚えやすいためだと思います。当時の人はみんな聞いて覚えて、それを自分でしゃべって次の人に伝える。こういう伝え方、口伝と言いますが、福音書はもともとそうして始まったので、そうすると覚えやすい、間違えにくいという形が必要なので、そういうふうなリストの作り方をしたと考えられます。逆のことを言えば、この12人は最初のキリスト教徒の集りの中でそれだけ重要な存在であったということの意味することになるでしょう。このリストが出てきて、これからずーっとこの人たちは一緒に生活をする。

そして、次の話はベルゼブル論争。ベルゼブルというのは、その土地の当時のある土俗的な神の名前ではないかともいわれるし、悪霊の別名だともいわれるんですけど、ともかくイエズスに敵対する霊として考えられてる存在です。この存在とイエズスとの関係を巡っての論争がその次に述べられます。それは簡単に言うと、イエズスが悪霊を追放したりするという話がこれから何度も出てくるんですけど、それを見たイエ

ズをあんまり快く思えない当時の指導者たちは「イエズスというあの男は悪霊の頭の力を借りて自分の悪霊を追い出しているんだ」という言い方で非難をする。それに対してイエズスが「そんなことはないでしょ」と言って、論理的にそんなことしたらサタンの国は内から崩れるでしょう。内輪もめをするということですから。そういうことではなくて、神から頂いた力で私が悪霊を追い出しているんだったら、新しい神様の支配する世界が始まったってということになるでしょうという意味のことを語る部分なんです。その初めのほうにイエスの身内の人々がイエズスのうわさを聞いてイエズスを捕まえにきたという不思議な一文が出てきます、20節から。要するにイエズスのすることなすことが人々を引き付けるものですから人々が集ってくる。おまけに不思議で説明のつかない人に取りついた悪霊、私たちの現代の考え方でいうと中には病気もあると思うんですけど、それをイエスが癒していくのを見て、悪霊に取りつかれてるといううわさが広がったみたいで、それを聞いた身内の人々がイエズスを取り押さえにきた。これは現代でも起こるんだらうと思いますから、あんまり自分のうちの息子が悪いことをして評判を立てたり、不思議な他の人と違った才能を持っていたりすると、評判が立つと親は心配でしょうから、あんまり世間の目にさらしたくないから、できるだけ人目に付かないようにしようと思しますよね。それと同じことだと考えればいい。ただし、身内が親類縁者という意味の身内か、当時の人は同じ村の人でも身内といったりすることがあるので同郷の人々という意味か、ちょっとここからははっきりしませんけど、イエズスに近い人々がイエズスを捕まえにきた。その後そのイエズスの母が訪ねてきて、イエズスから「私の母とは誰か」と言われるという場面が出てくるわけです。

すると、この全体の流れを考えるとイエズスと弟子たちの新しい絆による、新しい共同体が動き始めたというのが最初の話で、次に今まで身近であった身内の人、身内といわれてる人を広く取るか狭く取るかは別として、いわゆる血の絆あるいは土地の絆、地縁血縁で結び付いていた絆の中でイエズスがそこから、同じ絆に結ばれていた人々から遠ざけられようとするという動きが出てきた後、最も身近であるはずの母と兄弟、ここではたぶん兄弟は、プロテスタントの人々は一般に文字どおり兄弟と受け取るんですけど、だからイエズスに兄弟がいたということになるんですけど、カトリックはもうちょっと広い意味でこれを解釈して、ユダヤ人は当時いとも兄弟と呼んだりしているという、そういうデータがあるので、その他のところからも合わせて考えて、これを広い意味に取るという違いがありますけど、ともかく身近な人が母のマリアと一緒に会いにきたという場面が最後のところです。そこはそのまま読んでみますね。

——イエスの母と兄弟たちが来て外に立ち、人をやってイエスを呼ばせた。大勢の人

が、イエスの周りに座っていた。「御覧なさい。母上と兄弟姉妹がたが外であなたを捜しておられます」と知らされると、イエスは、「わたしの母、わたしの兄弟とはだれか」と答え、周りに座っている人々を見回して言われた。「見なさい。ここにわたしの母、わたしの兄弟がいる。神の御心を行う人こそ、わたしの兄弟、姉妹、また母なのだ。」

あるご婦人たちとこの箇所を読んで一応説明したんですけど、終わった途端「マリア様がかわいそうだ」と婦人たちは言い出しました。「このイエズス様、ひどい」。それを聞いたときに「ああ、そうだろうな」とは思ったんですけど、特に集ってるのが母親たちでしたから。もし、この人たちが自分の息子がこんなことを自分に向かって言ったとしたらと思ったら、それは耐えられない言葉と聞こえたらと思うと、確かにこのイエズスの言葉はきつい。何でこんなことを言うのかという説明も何にもない。だから、この箇所は特にマルコはそうだとされるんですけど、イエズスは母マリアと、あるいは身内の人と距離を置こうとして、拒絶してるという学者すらいるんですけど、そういうふうにいわれる根拠の箇所になってるわけです。

文字どおり受け取れば、今読んだように確かにイエズスはそういうことを言ってる。それをどう考えればいいんだろう。だから、ここからは聖書を扱う場合には聖書の解釈という形を採ることになるんですけど、ここからだけではどうにも、どう解釈すればいいのか分からない。もう少しイエズスに好意的に考える可能性もないとはいえないですけど、一番可能性が高いのはマルコがイエズスと母との間に距離を置こうとして、あるいは母を拒絶しようとしてと受け取るのが一番自然な解釈ということになるでしょうか。本当にそうだろうか。もう一回これを、この文脈と呼ぶんですけど、ある話を挟んでその前後にどういう話が流れとして出てくるのかという、その中に置き直して読むと、これは少し違った意味合いを持ち始める。

まずイエズスは弟子たちを選んで、共に生きることを通して、ある新しい絆で結ばれた小さなグループで動き始めようとしてる。それについても、何のためかという説明は特にありませんけど、イエズスとのつながりが血縁とか地縁によるものでないことは明らかですから、たぶんこの場合はイエズスが与えられた使命と弟子たちに託そうとしてる使命における絆によって結ばれてる新しい共同体。それが動き始めたと思ったら、今度は今までの地縁血縁によって結ばれていたと思われる身内の人と呼ばれてる人からイエズスは気遣い扱いにされそうになってる。つまり古い常識的な絆によつてのイエズスとのつながりはもうあんまり役に立たないということを示すような、そういう動きが始まる。その後、その一番近いはずの血縁関係にあるマリアやいとこたちの訪問に対してイエズスがこんな言葉を使うという流れが来る以上、単に最後の部分だけで読むということではできないだろう。

地縁血縁ってのはどういう意味を持つんだろうか。私たちが人と人がつながって

く上でのつながりはいろいろあります。そのつながりの種類によって共同体の性質がそれぞれ違ってくるわけです。一番強いのが血縁でしょうね、普通にいうと。地方によっては地縁っていうのもすごく強い。ユダヤ人の場合には地縁血縁はすごく強い。だから、その少なくとも地縁の中に入ってこない人々を彼らは異邦人と呼ぶわけです。自分たちとはっきり(ユダヤ人)を区別する。そういう社会にあって、イエズスがいわば地縁に逆らうような行動、言動をするということに意味があるとしたら、血縁とか地縁というのはどういう意味合いの絆なんだろう。恐らく普通にいえば、最も強い絆ですね、私たちが知ってる。特に血縁っていうのは理屈を超えた人と人とを結ぶ力を持つ。ただし、この地縁血縁は強ければ強いほど、他の人を中に入れれないという性格を持つ。たぶん絆に共通の性格だと思うんですけど、引っ張り合う力が強ければ強いほど、それ以外の人がある絆の中に参加することが難しくなる。つまり、排他性を持つといえますけど、強い絆は必ずその強い排他性を同時に持つというのが普通の自然の形だといえるでしょう。

例として血縁関係を考えれば、これは第三者は全然入ってこれない。血縁に代わる一番強い絆は結婚という形で、新たな男女が出会ってつくり上げる絆で、これで家庭ができるわけですけど、これは第三者は入れない。原則的には同じ資格では入れません。入ると家庭が壊れちゃいますから。そうでないと困るんです。なぜ困るかという、そこから新しい命が芽生える苗床になるからです。だから、その絆は比較しても他に似たような絆は見つけれない。それほど夫婦の絆ってのは強いだけじゃなくて不思議な性格を持つんですけど、それは当然で、それが新しい命を生み出し育てていく共通の場になるわけですから。だから、それだけ排他性が強くなる。親子の絆も排他性が非常に強いんですけど、この結婚によって新たにできた絆に結ばれた人たちは相手の人のお父さん、お母さんを「お父さん」「お母さん」と呼ぶことは呼びますよね。でも、文字で書くときどうするかっていうと、義父の義という言葉は日本語では付けます。お義父さんというんですけど、つまりやっぱり全く同じにはなれない。それは何を意味するかっていうと、親子の絆がそれだけ排他性が強いということです。良くいえば、引っ張り合う力が強い特殊なもので、誰もそこに同じ資格では参加できないほど強い特殊なものだということを表していると考えていいでしょう。

そういうことを知ってる私たちは、もしイエズスが「私の母とは誰か」「私の兄弟とは誰か」と言って、人々が「お父さん、お母さんが、あるいはご兄弟が会いにきてらっしゃいますよ」と言って、この場合、特別扱いをするのをイエズスが認めるとしたら、どんなふうになるんだろう。イエズスとの関わりに二重性ができる。いや、できるというよりも本来あってそれは消えないんですけど、それが表に出てくると一番近くにいるのは母でしょうね。親子の絆を持っているのは母マリアだけですから、その

母マリアとイエズスとの絆はこれは別格、そして誰もそこに参画できない。いとこであろうと本当の兄弟であろうと、これも血の絆によるものだとすれば、これもまた私たちは全然参画できない。というふうに、イエズスとのつながりに何種類かの違ったものがそこに存在することになる。たぶんそのことをイエズスは「いいや、私と関わるのは、あるいは神様がお望みになる私との関わりはそういう排他性のないもの、みんなにとって開かれているもの、誰でもが関わることのできるもの。それが新しいおん父が望まれたご自分との絆であり、私との絆のありようだ」ということをこういう形で伝えようとしたと、もし受け取ることができるなら、どういうふうになるだろうか。だからイエズスは「誰が私の母、誰が私の兄弟か」とみんなに反論して、反対に問い掛けて、そして自分で答えを出して「私の母、私の兄弟っていうのは、あなた方、今ここにいて私の言葉を聞いているあなた方なんですよ。神様の御心を行う人であれば、誰もが同じように私の兄弟、私の母、私の姉妹となるんですよ」と言うことによって、新しい絆によって神と関わっていくことのできる、そういう時が来たということを知りようとして、そんなふうに読み取ることはできないだろうか。そうすると、このイエズスの厳しい言葉は、いや本当はマタイもマルコもルカも喜びの訪れを書くためにこういう著作を残したわけですから、喜びの訪れっていうのは福音と呼ばれるもので、そのとき初めてこのイエズスの言葉が福音としての性格を持ち始めることができる。そして、この絆は全く誰にもオープンで、条件は本人が望むならということだけしか残らないということになるんだと思います。マタイとルカの表現がちよっとずつ違うんですけど、基本的には同じ。ここでは同じことを述べてますから、同じ出来事を自分風の福音書の中にこういう形で取り込んで述べてくれたんだと思います。

そのように改めて考えて、このイエズスが示した新しい絆、みんなにオープンな、公平な、誰もが望めばできる絆の中でマリアをもう一回考え直してみたら、横の絆の中でイエズスに最も近くいるのは他ならぬマリアということになるだろう。私たちがよく知っている天使のお告げのところで、ルカが描く天使のお告げの中で、マリアが神様にした応答は「お言葉どおり、この身になりますように」というたった一言だけで、あれがマリアの生涯を決定付ける特徴を最もよく表してる言葉だと一般にいわれている言葉です。つまり、神の言葉、神のお望みに全面的に託して従っていきますというのがマリアの生き方の根本を表してるとすれば、イエズスが示したこの「私の母、私の兄弟」というつながりは何によって生まれることになるかということの中で、本当はマリアが一番イエズスの近くにいるということにもなっていくのだなということは、今のようなことを踏まえても、それは確かにいえるんだと思います。これが、このマリアが登場する、3つの福音書に共通の場面で登場するたった1つの箇所の中でマリアが示す姿ですけど、ここではマリア自身は何にも言葉を発していないし、どんな行

為もしてない。ただその場において、イエズスが代わりにマリアについてこういうことを言う。これを今のように、初めてそういう形で読み直したときに思ったのは「そうか、イエズスはマリアまで使おうとしてる」と、そういうふうに思いました。おん父の御旨を伝えるためなら、人々の救いを、人々に道を開くためなら、母のマリアをもそのために使おうとする。たぶんマリアはこのときにも返事を求められたら、「お言葉どおりになりますように」とだけ返事するでしょうね。だから、そうかイエズスはご自分が人々のために生きようとするときに、そのために必要なら母親のマリアでも使うんだ。そんなふうな印象を非常に個人的には強く持ちました。

終わりまで愛するイエスの母がマリアを母として与えて…

もう一つ、皆さんと今日一緒に考えようとしたのは、その次から最初だけ13章のところを挙げて、それから18章に飛んで、イエズスの死の場面までを長く取り出したのは幾つかのことを皆さんに確かめてもらおうと思ったからですが、見たいのはこの一連の話の一番最後のところ、イエズスの死の場面だけなんです。そこでのイエズスがマリアとマリアに向かって言った言葉の意味を考えるために、長い文脈ですけど、それだけのテキストを一応参考までに用意しました。だから、最初に実際に読みたい終わりのところを先に見ていただこうと思います。

それは皆さんが割合よく知っているイエズスの死の場面、死にまつわる場面だろうと思います。よく知ってるといっても、皆さんは彫刻とか有名なミケランジェロのピエタという彫刻の姿に表されたマリアとイエズスの姿とか、音楽によって表されるこの場面だろうと思いますが、ここでは聖書はそれをどう描くかということ、ほんの数行でしか描いていません。そこを最初に読んで、その内容を考えるために前のほうの描写の幾つの特徴を指摘しておきたいと思います。19章がイエズスの死の場面が出てくる場所ですから、19章のところを開けてください。そこに「十字架につけられる」という表題の付いた部分が出てくると思います、17節の辺りから。ここはイエズスが十字架につけられる場面ですけど、そこでイエズスは2人の強盗の間に十字架に磔(はりつけ)にされ、そういうイエズスをばかにしている例の有名な場面が出てくるんですけど、それが続いていって最後のところ25節。ここから25、26、27のところ息を引き取る直前の、いわゆるマリアに対する言葉が出てきます。25節から読みます。——イエスの十字架のそばには、その母と母の姉妹、クロパの妻マリアとマグダラのマリアとが立っていた。

ここからすぐ分かることはマリアってのは平凡な名前だったんだ。いろんな女性が名前として付けていた。もう私たちはイエスの母のマリアからマリアだけの名前みたいな印象があるかもしれませんが、そうではなくて女性の名前としては割合普通

だったということが分かります。そのクロパの妻マリアとマグダラのマリアとが立っていた。

——イエスは、母とそのそばにいる愛する弟子とを見て、母に、「婦人よ、御覧なさい。あなたの子です」と言われた。それから弟子に言われた。「見なさい。あなたの母です。」そのときから、この弟子はイエスの母を自分の家に引き取った。

こういうふうによハネはイエズスの死の場面で描いて、親子の別れを述べます。ここでもカトリックの立場からの解釈と、全部が全部ではないと思いますけど、プロテスタントの兄弟たちの解釈は少し違います。このテキストで見ると、最後にイエズスは弟子、イエズスの愛する弟子という謎めいた表現が使われていますが、その弟子にマリアを指して「見なさい。これはあなたの母です」と言ったというんですから、「あと、お願いね」とか「お世話してね」とか、そういう意味でイエズスは託されたと普通そういうふう考えられています。その意味も含まれてるんだと思います。

問題は、ここで母という言葉が何度か使われており、日本語の翻訳ではそれは十分に読み取りにくいんですが、原文とか外国語の翻訳の聖書で見ると、それははっきりしています。最初に「イエスは、母とそのそばにいる愛する弟子とを見て」という言葉で始まりますけど、その前にイエズスの十字架のそばにはその母と母の姉妹が、といわれており、その母はマリアのことです。これは外国語では「彼の」という所有を表す、あるいは帰属を表す代名詞で修飾されている表現です。英語で言うと、his motherとかyour motherとかって言う言い方に当たるものです。だから、「イエズスの母」という意味です。日本語では「その母」と訳しています。そういう表現でマリアが述べられていて、次に26節、「イエスは、母とそのそばにいる愛する弟子とを見て」と表現されてて、どうしてかここではその「his」に当たる所有、あるいは帰属を表す代名詞が付けられていません。これは文法的に考えれば間違いだとしか言いようがないほどの不思議な表現だということは認められています。その「イエズスの」という修飾語が落ちて、ただ「母」だけになってる。そして、イエズスの言葉があって、それからイエズスが弟子に向かって言う言葉の中にも一回マリアを指す母が出てきますけれど、「見なさい。あなたの母です」。今度は弟子に向かって言ってますから、「あなたの母」ですと所有なし、帰属を表す代名詞が出てきます。そして最後に、この弟子は「イエスの母」を自分の家に引き取った。何でこんな書き方をするんだろう。つまり、今の修飾語を中心に考えれば、「イエズスの母」、そして誰のという修飾が全然付いてないただの「母」、それから弟子に向かって「あなたの母」。そして最後に、また初めに戻って「イエズスの母」というふうに変っていくことに何か意味があるのではないか。それとも単なる過ち、書いたヨハネの間違いなんだろうか。そのことが専門家たちの間では問題にされます。

日本でも出たように、フランス語でもプロテスタントの聖書学者とカトリックの聖

書学者が長い間共同作業して、両方に一緒に使える共通の翻訳の聖書を出そうということで、フランスでも有名なフランス語訳の聖書が出ています。今『旧約聖書』も出ているのですが、その聖書は通常「トブ」と略していられています。「TOB」「トブ」、有名な翻訳聖書です。翻訳も優れていて、何より貴重なのはそれに注釈が付いているんですね、脚注ですけど。プロテスタントの訳したものには一切注はありません。説明もありません。そういう伝統をプロテスタントの翻訳は持っています。本文だけしか翻訳しません。ところが、これはカトリックと一緒にやったものですから、両方の学者たちが相談して必要なところに脚注を付けているんですね。この部分の脚注を全て読んでみると、こういう意味の脚注が付いています。25節から「la mère」というさっきの誰の母か何にも説明がない形の、ただ母と訳されてる、その部分に付いてる注で、25節から始まって、所有を表すフランス語の「sa」、その「彼の」という修飾語がなくなっている。「まるでマリアはもうイエズスだけの母ではなくなったみたいに」という注釈がフランス語で付いています。つまり、これは学問上文法的にもおかしいと学者たちから思われてる翻訳の仕方だということになります。文法的にこれ間違いないんだけど、どうしてかこういうふうにヨハネはここで書いてる。だから、これにはたぶん意味があると翻訳者たちも考えてるということを表します。

その意味をどう考えるかというのは、これは聖書学者たちによっても必ずしも一致しないんですが、一応考えられるのは、この場面でイエスは自分の母を弟子に託するときに自分だけの母としてではなくて、弟子の母でもあるものとして、この弟子は一般的にはそう認めない学者もいますけど、キリスト者たちのシンボリックな代表としてここに立っていると解釈されるのが普通なんですね。それは、そのフランス語の共同訳の注でもそういうふうに書いてあるんですけど、もちろんプロテスタントの教団の人はそういうふうには認めません。たいてい認めない人が多い。もっと厳密に文字どおり考えることが多いからです。だから、ここでも立場によってちょっと違うんですが、聖書学的にはどうもこの母の表現の仕方の変化を追っていくと、イエズスが自分の母を、この弟子が何を象徴しようとして、この弟子の母でもあるものとして残していこうとしたと考えざるを得ないということになって、あとは弟子がどういうことを象徴する意味合いでここに立っているのかということになるんだと思います。カトリックの場合には、キリスト者一般を象徴するものとして理解するのが普通の伝統に今はなっています。

ところで、その問題が残りますけど、その前のほうに長い文脈を付けたのは、そんなふうに本当に解釈していいのかということがどうせ問題になると思うんで、実はそれはヨハネの書き方から導き出される読み方ですということを少しお話ししようとして、前のほうからの部分を付けました。これ全部読むのも長くなるので読みませんけ

ど、この部分は18章からイエズスの受難物語のハイライトの部分がこういうふうを書いてあるのですが、『ヨハネ福音書』全体がそうなんですけど、特にこの部分、受難物語を扱うヨハネの書き方はどう考えても普通の表現をしてとは思えない。一般的に『ヨハネ福音書』が使っている言語は詩の言葉、ポエムという意味の詩で、詩的な表現、言葉遣いをしてるといわれます。これは聖書学者たちが共通に認めているものです。皆さんもそのつもりで読んでいけば、幾つかの例にぶつかるとと思います。象徴言語とも境界言語、ともいわれることがある独特の表現の仕方を使うんです。だから、読んでいてちょっと意味が分かりにくいことがあったりもします。

例えば、もっとずっと前のほうでニコデモというユダヤ人の指導者が夜中にイエズスをこっそり訪ねてきて話をする場面が出てくるのですが、ニコデモはユダヤ人の中で先生のような立場、だから知的にも信仰面でも立派な人ですけど、でもイエズスと付き合ってるということがまだその段階では公にしたくなかったのでしょう。こっそり夜中に訪ねてきてイエズスと会話を交わす中で、イエズスが「新たに生まれなければ」ということを言います。あなたはもう一度新たに生まれなければ。すると、ニコデモはもう大人ですから、びっくりして「私がもう一度生まれるのか」という疑問を持ったのに対して、イエズスはそのときにそういう表現を通して言おうとしたことは、もちろん赤ん坊が生まれるみたいにもう一回赤ん坊に戻って生まれなきゃという意味ではないわけで、「神様によってもう一度生まれ直さなければ」という意味だと思えますから、キリスト教的には洗礼によってキリスト者になる、そのときによく「新たに生まれる」という言い方を使うことがあります。そういう宗教的な意味だと考えられるのですが、ヨハネはそのときに「上に」「上から」と言おうとしたのか、「新しく」と言おうとしたのか、どちらとも取れるような表現を説明なしに使うんです。例えば、ヨハネが使う境界言語とかシンボリックな表現方法という例の1つはそういう使い方をします。だから曖昧な、どっちにも解釈できる。恐らくヨハネは両方の意味を込めて使うんだろうと思います。

そういう表現があちこちに出てくるんですけど、特にこの18章になってくると、そういうヨハネの特徴が散見されるといわれています。ここでは単語ではなくて、例えばヨハネの18章の受難物語を読むと、ピラトがイエズスを裁判してははずなのに、まるでイエズスがピラトを尋問してるような印象を受ける。つまり、裁かれてるイエズスが王の威厳を持って、そういう態度でピラトと接してるということがあからさまになってくる。また、ピラトから死刑の判決を受けて、イエズスが鞭(むち)で打たれて茨の冠を被せられて刑場に連れていかれるとき、その前に兵隊たちはイエズスをばかにするために王様のカリカチュアをつくるんですね。つまり、ぼろぼろの、よれよれした王様のマントを着せて、王冠の代わりに茨の冠をおし被らせて、王杖(おうじょ

う)、王様の杖(つえ)に代えて葦(あし)の杖を持たせて、ひざまずいて「王様万歳」と言ってばかにする場面が出てきます。それは他の福音書にも出てくるのですが、それが終わって刑場に連れていかれるとき、他の福音書だと、いったんその服装を脱がせます。それじゃ歩きづらいでしょし、元の汗と血にまみれたイエズスの服を着せて十字架を担がせて、無理やり刑場に連れていく。他のどの福音書もそうです。服を脱がせてイエズスの服を着せて連れ出す。

ヨハネはそう言いません。その服を脱がせて元の服を着せてという表現をどうもヨハネはわざと省いたみたいです。それでヨハネは何を言いたいかという、「いや、イエズスこそ本当の王だ」ということを読者に伝えようとする1つの手法だと考えられます。ピラトとのやりとりも、イエスが王としてからかわれた服装を着けたまま、王様の服装のまま、からかいの服装ではあっても王様の服装のまま十字架を担いで刑場に行くという。ピラトはどうか、イエズスを裁くとき、出たり入ったりしてます。何回出て何回入ったか念のため数えてみたんですけど、ちゃんと同じ数だけ外に出てきて、同じ数だけ中に入っています。外に出てきたら何をするか、中に入ったら何をするか、大体パターンがあります。みんなヨハネがあることを伝えようとして使ってる。これは言語ではないですけど、象徴的な表現形式ということになります。

それをずっと追って行って、この最後のさっきのところにくると、ここだけ何の象徴性も持たせずに何の二重性も持たせずに、このイエズスと母との場面を書いたとはちょっと考えにくい。その表現の方法としても考えにくい。むしろ、前の流れと同じ性質の流れで書いてると考えるほうが普通。だとすると、母を巡る「イエズスの」とか、それを取った形とか、弟子には「あなたの」とか付けたりする、あの移りゆきは何らかの意味を持つと考えるのが作品の読み方としては普通だろうということになります。だから、特にカトリックではそうですが、イエズスは最後にご自分の母マリアを弟子が象徴しているキリスト者、あるいは(キリスト者と限定する必要はないんですが)自分がそのために自分の命を捧げた人々の母として明らかにすることによって自分の生涯を終わる。そういうことをあの書き方で伝えようとした。つまり、マリアは私たちに与えられた、私たちの母でもあるというキリスト者の考え方がそこから出てきているということになります。ある人が「何だ、それだけ?」と言ったんですが…。

あるプロテスタントの聖書学者、もう亡くなりましたけど、有名な優れた聖書学者でしたが、その人がアメリカで頼まれて講演したことがあって、その講演の原稿を読んだことがあります。見事な日本の戦後史の分析をしていました。もちろん聖書学者として分析をしたんですが、どんなふうに述べていたかと言うと、おおよそこうでした。戦後日本はまず父親を失った。これは大体分かると思います。権威を失ったということです。社会の支えになる権威。それ以降、若い人たちはもう従来の権威を全然

信じなくなっていました。学校でもたぶんそうだったんだと思います。昨日までアメリカは鬼畜米英と言っていた先生たちが終戦になって学校が再開した途端、まるでそのアメリカの民主主義をたたえるような、そういうことを言い出したわけですから、それは生徒としてはそんな先生をとて信じられないよという形になって、つまり権威が失墜した。そうして日本の社会は少しずつ少しずつその痛手から脱しようとして、懸命に働いた。でも田中首相の政策に現れるみたいに列島改造論みたいな、所得倍増論みたいな社会の動きが出てきたときに、今度は母親を失った。あのときに日本の自然はもう完膚なきまでに、改造のために、豊かになっていくためにどんどん手を加えられて、自然がどんどん傷ついていきました。今も同じですけど。その代わりに日本は豊かな社会に向けての歩みを手に入れたわけです。でも、母なる自然はもう日本から失われたと、その人はそう言いました。その結果、何が残ってるかということ、日本には孤児と老人だけが残ったと戦後の社会を分析しました。わたしは社会学のことはよく分からないし、歴史もそんなに詳しいことはよく分かりませんが、でも何となく当たってるなと思いました。それは、そのときに少なくともわたしにある種の説得性を持ったことは確かです。

今は母性が回復されてるのかどうか分かりません。日本はいまだに本当の意味の母親を失ったままなのかどうか分かりませんが、今日本の社会政策の中で一つの、よく話題になるのは待機児童ゼロという目標ですよね。あれは本当は何を指すことになるんだろう。いや、それが間違ってるという意味じゃなくて、待機児童がゼロということは、今母親の手で育てられざるを得ない子どもたちはみんな保育園に行く。みんな保育園の中に収まるということでしょう。母親たちは働きに出ることができる。そちらが本当なのか。それとも、そんな必要がないような社会をつくっていかうとすることが本当なのか。でも、後のほうのことはもう日本の政府も社会も目指そうとはしていないみたいな気がします。それは難しいのかもしれない。でも、本当はどうなんでしょう。

ちょうどそのころ、谷山にあるある児童養護施設の責任を取っていた、いや正しくは施設じゃなくてそれを運営している法人の責任を取っていました。いつも家庭で育ちたいのにそれができない。親が病気、親がどっかいなくなった、虐待を受ける、捨てられた。さまざまな理由で自分の父親と母親のもとで育つことができない子どもたちが代わりに入ってきて、高校卒業まで、育つわけです。そんな施設の責任を取りながら、それをなかなか難しいなと思いながら見ていて、ふと思ったのは母親がいるというのはすごいことだ。今の社会において子どもたちが本当の意味での母親をみんなそれぞれ持っていて、その母親のもとで育っていくことは本当はすごいことなんだと改めて思いました。それを奪われた子どもたちの現実を見ると、つくづくそう

思う。ちょうどそのときそのようなことを思っていたこともあって、もし今のような読み方がいくらか正統性を持つんなら、わたしたち人類がイエズスの母のマリアを自分たちの母でもあるという形で持つことができるというのは、これもまたすごいことなのかもしれないと思います。

実は、ヨハネにおける受難物語は13章から始まります。最後の晩餐(ばんさん)、お別れの食事の場面を描く13章から始まっていきます。ただし、17章までは長いイエズの一人話が続くんで皆さん読んで飽いてしまうかもしれません。そこにやたらとさっき言った象徴的なヨハネの表現方法が出てきますから。でも、その冒頭にこう書いてあります。

「さて、過越祭の前のことである。イエスは、この世から父のもとへ移る御自分の時が来たことを悟り、

つまり、自分が死の時を迎えたということを知り、
世にいる弟子たちを愛して、この上なく愛し抜かれた」

ここでもヨハネの象徴言語の特徴が出ていて、「この上なく愛し抜かれた」というのは2つの意味合いをすぐに思い浮かべます。力の限り、つまり愛の力の限りを尽くしてという意味で最後まで。それから時間的に最後まで、つまりイエズスの命の続く限り。恐らくヨハネはその両方の意味を込めてるだろうと思われませんが、とにかく、イエズスは可能な限り最後の最後まで弟子たちを愛し尽くされたとあって、そのイエズスのお別れの食事から今のイエズスの死の場面までがずっと書かれていて、最後に今読んだ死の場面が出てくるのです。そこでヨハネはこんなふう述べています。「イエスは、すべてのことが今や成し遂げられたのを知り、『渴く』と言われた。こうして、聖書の言葉が実現した」とあって、イエズスが最後にしたことが書いてあります。唇を酸味のするぶどう酒をつけた海綿のようなもので唇を湿してもらって、『成し遂げられた』と言い、頭を垂れて息を引き取られた」。これがヨハネが描くイエズスの最後の言葉になります。この「成し遂げられた」というのをギリシャ語原文で読むと、何とこの最初に書いた「さて、過越祭の前のことである」うんぬんで始まって、イエズスは「世にいる弟子たちを愛して、この上なく愛して抜かれた」と書いてあるところのギリシャ語表現と突き合わせると、この2つはいとこぐらいの言葉なんですね。つまり、言葉の根が同じで、そこから途中から枝分かれみたいにして出てきた2つの言葉なんです。だから、語源は同じということになります。

ヨハネはそこまで明らかにはしてないからわたしの思い違いなのかもしれないのですが、わたしにはこういう意味を持つと思われる。イエズスはいよいよこれからこの世を去っていく。弟子たちと別れて自分の使命を終わって、後を弟子たちに託して、おん父のもとに帰らなければならない。だから、力の限り最後の最後まで弟子たちを

愛したとヨハネは書いていたが、その弟子たちを最後まで愛するイエズスの愛は実はさっきの場面をもって終わる。自分の母を弟子に「ご覧なさい。これはあなたの母です」と言って譲り渡したことによって、イエズスは「すべて成し遂げられた」と言って息を引き取りましたから、この「すべて成し遂げられた」は、最後まで愛するというと言葉の根っこが同じだとしたら、ヨハネはマリアを弟子に託さないと、母のマリアを弟子たちに渡していかないと、イエズスが最後まで弟子たちを愛し通したことになる。今それが終わった。だから、「これですべてが終わった」と言ってイエズスは死んだというふうには読み取れないこともない。そんなふうには読み取るかどうか。あとは学者たちが何を言ってもわたしたちがそれをそうだと思うかどうかの問題にかかると思うので、わたしたちの受け取り方次第ということになるんだろうなと思います。この間、マリアは一言もせりふを口にしないので、一言ぐらいしゃべればいいのと思うんですけど、マリアの気持ちが分からない。ただ幸いなことに同じヨハネが別のところで一言マリアが口にした場面を残してくれましたから、そこを最後に、もう時間がかかり過ぎたので、すこしだけ触れて終わることにしたいと思います。

母マリアの唯一の願い

一番最後にある1枚だけのページがそうです。ヨハネ福音書の2章で、イエズスが初めて奇跡を行ったということが述べられている、あの有名な「カナでの婚礼」といわれている話です。イエズスが最初に奇跡を行ったのは結婚式だった、結婚式の披露宴の席だったというのもとても興味深い。普通はもうちょっと荘厳な、そういう場面でイエズスが奇跡を行うほうがふさわしいのではないと思うのに、ヨハネはここでは少なくとも違う。みんなが大喜びして、ユダヤ人の披露宴なので、中には酔っぱらっていた人もいたに違いない。1週間ぐらいは続いたそうですから。そういうみんなが本当に喜んでいる、新しいカップルが誕生して心から喜んでいる、そういう場で実はイエズスは最初の奇跡を行ったというのも考えようによってはなかなか興味深いなと思います。

その披露宴の場面があって、カナというのはマリアが住んでいたナザレから16kmかそこいらぐらいいか離れてないから、マリアはたぶん招待客というよりも、招待されたのかもしれませんが、お手伝いに来ていたのではないかと考えられます。イエズスと弟子たちも招かれて一緒にいたのでしょう。ところが、何日も続くお祝いの席らしいので、それは花婿はたいへんだったのではないかと思いますけど、どれくらいぶどう酒を用意すれば足りるのか。招待された客だけじゃなくて、村の人はみんな自由にお祝いにきて、自由に食べたり飲んだりして帰っていったみたいですから、これが何日も続いたら、いくら食べ物があっても、ぶどう酒があっても、それは大変だろ

うなどは思います。だから、その分たっぷり用意していたはずなんです。ところが、その途中でマリアは気が付いた。お酒がなくなりかけてる。マリアはそっとイエズスのところに行って、こんなせりふを言っています。「ぶどう酒がなくなりました」。すると、イエズスはまた非常に冷たい言葉を吐いています。「婦人よ、わたしとどんなかわりがあるのです」。日本語に直すと「関係ないでしょ」って言ったわけです。私とは関係ないでしょう、「わたしの時はまだ来ていません」。つまり私が何かをするという、そういう時はまだ来てないんですと。ところがマリアはそんなことお構いなしに召し使いに「この人が何か言いつけたら、そのとおりにしてください」と言って、引っ込んだわけです。たぶん台所にお手伝いに戻ったんだろうなと思います。

ヨハネはこの場面を説明して、その場に「ユダヤ人が清めに用いる石の水がめが六つ置いてあった。いずれも二ないし三メートル入りのものである」と述べています。1メートル入りのものは39ℓぐらいだそうです。相当大きなかめです。それが2メートル入りですから78ℓぐらい入る。どうも私はリッターではよく分からないので、さきほど升に計算してみたんですけど、4斗3升入りそれが6つあったというんですから、これまたすごい量になります。何でそんなたくさん置いてあったのかは、清めのための水がめとありますから、これは外出したときに、ユダヤ人が帰ってきたときに手を洗ったり足を洗ったりするための水なのです。外出すると清くないものにいつ触れたか分からないものですから、ユダヤ人はそのままでは食事したりできないので、外出から帰ったらそういうふうに洗う清めの水をいつも用意していた。だから、たくさんあったのでしょう。それに披露宴ですから、お客さんがいっぱい来るでしょうから。

それが置いてあったのでイエズスはその水をくんで、宴会係の長、給仕長のところを持っていきなさいと言うので、召し使いは訳分からないまま持って行って、給仕長にたぶん「飲んでみてくださいと言っていますよ」ということを言ったのでしょう。それで味見してみたら、何と最上等のぶどう酒に変わっていた。今もそうでしょうけど、こんな宴会のようなところでは上等のぶどう酒は最初に出して、みんなが酔っぱらったら、もう味も何も分からなくなるから安いぶどう酒をその後で出すのが習慣だったようです。だから、この給仕長は「何でそうしなかったんですか」と花婿に言ったというのですから、よっぽどおいしいぶどう酒に変わっていたんでしょう。ここでこの話は終わって、「イエスは、この最初の上等ぶどう酒をガリラヤのカナで行って、栄光を現された。それで、弟子たちはイエスを信じた」。すると、これは直接の目的は弟子たちのために行われた奇跡ということになるでしょう。内実としては、たぶん宴会に来ているお客さんや宴会の責任者の花婿・花嫁のために行われた奇跡ですが、直接この全貌を知ってるのは弟子たちだけです。だから、弟子たちはイエズスの力を見て信じるようになったと述べているのでしょう。

大学生時代のある学期末試験のときに、口頭試験でこの話の意味を問われて、面食らったことがありました。だから、私にはなかなか忘れがたい話になりました。実は新約聖書でマリアが人間に向かってせりふを述べる場面はここだけだと学者たちは言います。マリアは他にももちろん、神様に向かってはお祈りという形で言葉を言います。賛美歌も歌っています。『ルカ福音書』に出てきます。それから天使の現れを受けてお告げを受けましたから、天使とやりとりをしています。だから、天使とは話をしています。でも、それ以外の人間、イエズスを除いたそれ以外の人間とマリアが話をする場面は確かに、隅から隅まで調べてみたのですが、一度もありません。ここ以外に一言もマリアは口をきいてない。それを知ったときに本当にびっくりするとともに、そこに何か意図があるのだろうか、ヨハネが伝えたい意図があるのだろうかと思いましたが、こればかりはヨハネは何にもヒントをくれないので、本当のところは分かりません。

ただ、こんなふうに思います。もしそれをそのまま受け取れば、このマリアの言葉はこの場面の中では召し使いたちに言われた言葉ですが、これを読むのは今では私たちですから、つまり読者がこれを読むわけですから、この言葉は明らかに読者に聞かせるために語られた言葉という意味合いでヨハネはここに記していることとなります。するとこれを読んでるときに、イエズスが「それは私と何の関係がありますか」と言うと、マリアは私たちのほうにひょいと顔を向けて「この人が何か言ったら、そのとおりにしてくださいね」と言って、さっさと引っ込んだ。つまり、これはマリアが私たちにに向けたメッセージだというふうに取り取ることができるとしたら、どういうことになるだろう。なるほどマリアにふさわしい、たった1つのメッセージだとは思いますが。聖書のマリアが出てくる箇所を総合してみても、マリアが聖書を読む読者にたった1つ望んでることがあるとすれば、まさにこのことだと思われるからです。マリアは決して自分のことは言いません。自分のことを頼まないし、自分の願いも私たちにに向けて発することはない。マリアが発するのは「ねえ皆さん、この子の言うことをよく聞いて、そのとおりにしてくださいね」というメッセージだけだということは、まさにそのとおりに思います。

そして、純心でこのマリアのメッセージを今のように読み取るとしたら、学生さんたちにどう伝えたらいいのだろう。何をイエズスが私たちに語っていると考えるのか。そして、それを学生さんたちにどのような言葉に託して、あるいはどのような学習に託して、それを伝えることができるだろうか。そう思いめぐらせばかりです。長時間、お聞きくださってありがとうございました。